



2011年10月12日放送

漢方頻用処方解説 人参湯

富山大学大学院医学薬学研究部和漢診療学講座

藤本 誠

はじめに人参湯の紹介をいたします。エキス製剤における効能・効果は、体質虚弱の人、あるいは虚弱により体力低下した人の次の諸症。急性・慢性胃腸カタル、胃アトニー症、胃拡張、悪阻（つわり）、萎縮腎 となっております。

人参湯を使用するときの目標ですが、比較的体力の低下した冷え症の人で、食欲不振、胃部停滞感、下痢など胃腸機能が低下している場合に用いるのが一般的です。ここでの下痢は、いわゆる陰証の下痢で、腹痛を伴わないにおいがきつくない下痢のことが多いです。また、「唾液が口に溜まりやすい」と訴える症例が多いです。

腹証ですが、腹力は軟弱であることが多いです。心下痞鞭が認められます。ただし、時に腹壁が薄く緊張して、腹直筋が板のように触れるような場合もあります。胃部振水音が聴取されることも多いです。

人参湯の出典について、そしてそこに記載されている主な条文についてご紹介いたします。人参湯は『傷寒論・金匱要略』が出典となります。『傷寒論』では、理中丸という丸薬として収載されております。条文を見ていきます。

「霍乱、頭痛、発熱、身疼痛、熱多く水飲まんと欲する者は、五苓散之を主る。寒多く、水を用いざる者は理中丸之を主る。」

霍乱という、現代で言うところの嘔吐下痢症を呈していて、頭痛・発熱・体の痛みの自覚がある症例で、水を飲みたがるのは五苓散の適応であり、裏寒があつて水を飲みたがらないものは理中丸の適応であると言っています。五苓散の場合は口渴があり、水分を摂取しても尿があまり出ません。人参湯の場合は尿の出がよいです。

次の条文ですが、「大病いえて後、喜唾久しく了了たらず、(略)理中丸に宜し。」(大病はほぼ治ったが、水っぽい唾液が口に溜まってさっぱりしない。そのような場合には理中丸がよい)

診察で病歴を聴取している際に、唾液がたくさんたまってくる患者さんを見ることがありますが、そのような症例には人参湯が適応になることが多いです。大病後の人だけが適応になるというわけではありません。

次の条文です。「胸痺、心中痞気、気結んで胸に在り、胸満ち、脇下より心を逆搶するは、枳実薤白桂枝湯之を主る。人参湯もまた之を主る。」

胸痺というのは、胸が塞がったように痛くて、胸にぎっしりと物がつまっている感じがある状態です。そして、脇の下から突き上げるようにして痛みが来る。このような時は枳実薤白桂枝湯が適応である。そして、人参湯もまたこのような状態の時に適応となるという条文です。

枳実薤白桂枝湯は、詰まっている気を破るイメージの方剤です。人参湯も胸痺を治療する方剤ですが、人参湯の場合は、同じような胸が詰まるような症状があつても、その原因は裏寒によるもので、温めることで気の滞りを散らせます。

人参湯の適応になる症例は、腹力が軟弱であることが多いですが、この胸痺に対して人参湯が適応になる際には、腹筋がしっかりと張っていることが多いということを、大塚敬節先生が解説されています。

人参湯の構成生薬とそれぞれの効能について解説します。人参湯は4種類の生薬で構成されています。人参、乾姜、甘草、白朮の4種類です。

人参の作用は、補気、健脾、安神、これは精神を安定させる作用のことです、そして止渴。消化管の虚弱を補います。人参は黄耆と並んで、気を補う代表的生薬です。

乾姜の作用は、健胃、去痰、温熱。胃腸を温めて、水分代謝を改善します。乾姜は生姜を蒸した後に乾燥させたもので、附子に匹敵するほどの熱薬とされています。

甘草の作用は、滋養、消炎、止痛、調和、鎮咳。構成生薬全体を調和させて、胃腸の虚を補います。

白朮の作用は、健胃、滋養、利水。胃腸の虚を補って、胃内停水を去ります。

朮には白朮と蒼朮がありますが、白朮は主に胃腸の水滯を去って健胃・滋養するのに対し、蒼朮では体内の水毒だけでなく、体表部の水毒も除いて、関節の腫脹や疼痛を改善させる作用があるとされています。ツムラ製の人参湯エキスでは白朮ではなく、蒼朮が使用されています。

人参湯は先ほど示しましたとおり、甘草と乾姜の組み合わせが含まれており、甘草乾姜湯という 2 種類の生薬で構成される漢方薬の方意が存在することが考えられます。甘草乾姜湯は、『傷寒論』と『金匱要略』に記載されています。

『傷寒論』では、太陽病上篇に記載されています。条文を解説しますと、「傷寒にかかって脈が浮いている。発汗して脱水傾向となり、動悸して足がよく伸びなくなった。この脱水の症例に、本当は与えてはいけなかったのに桂枝湯を与えてしまった。結果として更に発汗して、ショック状態に陥った。喉がからからになって身の置き所がないほどの強い倦怠感が出てきて、嘔吐している。そのようなときには甘草乾姜湯を与えなさい。」(意識)と言っている。

つまり、脱水でショックになった場合に用いる方剤であると『傷寒論』では言っているのです。

一方、『金匱要略』ではどうでしょうか。ここでは「肺痿（今で言う気管支肺炎や肺結核と考えられる病気の患者）で、水のような痰を吐いて、咳が出なくて、口渇がなくて小便が多い。これは肺が冷えているから起こるのであって、甘草乾姜湯で温めればよい。」(意識)と言っている。つまり肺の水滯の場合に用いる方剤であると『金匱要略』では言っているのです。

人参湯の条文の中で、「大病いえて後、喜唾久しく了了たらず、(略)理中丸に宜し。」というのが有りましたが、喜唾とは唾液がたくさん出ていることをいいます。この喜唾は、『金匱要略』の甘草乾姜湯の涎唾多しにつながってきていると考えられます。つまり、甘草乾姜湯は水毒を治する方意があると考えられます。

この甘草乾姜湯に人参と白朮が加味された方剤が人参湯です。

甘草乾姜湯に茯苓と白朮が加味された方剤が苓姜朮甘湯で、これは腰以下が冷えて痛んで重だるい時に使う方剤です。

甘草乾姜湯に附子が加味された方剤が四逆湯になります。四逆湯は回逆湯ともいいます。厥陰病期の方剤で、精気が虚脱して四肢が冷えたもの、ショック状態に陥ったものに用いるものですが、必ずしもショックの時にしか使わないわけではなく、急性熱性疾患以外の場合、冷え症に用いることもありますし、冷えがベースにある皮膚疾患などの治療の際に併用することがあります。

最後に古医書における人参湯の記載について紹介します。一つ目は尾台榕堂の『類聚方広義』からです。3つの適応例が紹介されています。

一つ目は産後に下痢して、からえずきして、心下痞鞭が見られ、腹痛して小便が出ない者。二つ目は持病がなかなか治らず、心下痞鞭して、からえずきして腹痛して、大便は下痢して、むくみが見られる者。三つ目は老人で季節の変わり目ごとに下痢して、腹が冷えて痛み、心下痞鞭して、からえずきするもの。それぞれ難治であるが、人参湯を投与する

のがよい。

次に浅田宗伯の『勿誤藥室方函口訣』からです。

虚証の胸痺で、太陰病期の嘔吐したり下痢したりする症例には人参湯の適応である。四肢が冷えている場合には附子を加味して使いなさい。四逆湯とはその目標は異なる。四逆湯では下痢清穀、これは食べたものが消化されずにそのまま出てくるような下痢のことですが、これを、四逆湯を使う第一の目標にする。人参湯の目標はそのような下痢ではなくて、嘔吐したり、下痢したりといった症状であると言っています。

以上で人参湯の解説を終わります。